

リーディングスキルテストの共同研究



国立情報学研究所社会共有知研究センター長
情報社会関連研究系教授

新井 紀子氏



筑波大学
ビジネスサイエンス系准教授

尾崎 幸謙氏



東京都立大学
人文社会学部准教授

登藤 直弥氏

はじめに

リーディングスキルテスト（RST）とは、生涯学び続けることが求められる変動の時代の基本スキルである汎用的基礎的読解力（リーディングスキル：RS）を測るためのテストです。このテストは、コンピュータ上の調査（CBT）で実施され、主述関係の読み取り（係り受け解析）や、新しい概念の理解（具体例同定）など、6タイプからなる基礎的読解スキルを測定します。とだつ子が更なる学力向上を目指せるよう、すべての能力を支えるRSを、様々な教科の学習を通じて育む必要があります。

■本年度の戸田市リーディングスキルテストと県学力調査の結果から

戸田市でのRSTの実施は平成28年度に開始し、8年目に当たる本年度は、小学校12校、中学校6校が受検しました。昨年（小学校4校、中学校2校）に比べ多くの学校で実施されたといえます。

本稿では、本年度のRSTと埼玉県学力・学習状況調査（以下、県学調）の結果の関係について新しい分析結果を報告します。RSTと県学調は毎年実施しているため、一人一人の子どもの得点の変化を追うことができます。本年度の分析は昨年度と同じで、RSTの得点の伸びが県学調の得点と関係するか否かを調べるものです。異なる年度・学年でも同様の分析結果が再現されるか調べました。

（1）DEP^{（注1）}の伸びと県学調の関係〈国語〉

以下の表1は中1（令和4年）から中2（令和5年）にかけてのRSTのDEPの成績の伸びと中2の県学調との関係（2列目から4列目）および、中2（令和4年）から中3（令和5年）にかけてのRSTのDEPの成績の伸びと中3の県学調との関係（5列目から7列目）を示したものです。表1の数値を説明する前に、結果をご理解いただくために必要な説明をします。

表1の「読み」は国語の全問題のうち読みに関係する問題の合計点を求めた場合です。新学習指導要領では、児童・生徒が学校教育において身に付けるべき力を3つの観点に分類しています。そのうちの2つが「知識・技能」と「思考・判断・表現」です。「知識・技能」は知っていることやできることを指し、「思考・判断・表現」は論理的に物事を考えて周囲と協力しながら問題解決する力を指します。表1の「知識」と「思考」は、国語の全問題のうち「知識・技能」と「思考・判断・表現」を表す問題に関して合計点を求めた場合です。

表1：RSTの伸びと県学調〈国語〉の関係

	中1→中2のDEPの変化の分析			中2→中3のDEPの変化の分析		
	R5中2読み	R5中2知識	R5中2思考	R5中3読み	R5中3知識	R5中3思考
係数	0.528	0.289	0.906*	0.535	-0.141	0.467
満点	7	21	10	8	19	13

※[*]記載の数値が特に統計的に有意な関係が見られたもの

分析ではすべての生徒のデータを使うのではなく2つの限定を行いました。1つめは、中1から中2にかけての伸びを調べる分析では中1時点の国語の成績が上位25%の生徒を除き、中2から中3にかけての伸びを調べる分析では中2時点の国語の成績が上位25%の生徒を除いたことです。2つめはDEPの

（注1）：RSTで示される6つの観点の1つ。「係り受け解析」ともいい、「誰が（何が）」「何を」「どうした」という文の基本構造を正しく把握する能力。

解答数が22以下の子どもに限定しています。これは、DEPの解答数が過度に多い場合、RSTの成績の低下がみられるためです。設問をしっかりと読まずに、とにかくたくさんの問題に解答することに注力した生徒の能力値測定は正しく行うことができていないと考え、解答数が22以下の生徒に限定しました。

表1の「R5中2読み」の係数0.528は、中1時点で「読み」の得点が同じ生徒のうち、DEPの偏差値を1年間で5以上高めた生徒と、5以上高めることができなかった生徒とでは、前者の生徒の方が中2時点の「読み」の得点が平均的に0.528点高いことを意味します。最も関係があると考えられるのは「R5中2思考」です。DEPの伸びは「R5中2思考」に対して統計的に有意な（偶然とはいえない）関係があることが分かりました。係数0.906*は1問近く正答数が上がることを意味します。また、中2から中3にかけてDEPの伸びる生徒は中3時点の「読み」の得点が高いことも示唆されました。これらの知見は昨年の結果と似通っており、読解力の中でも最も基本的な文節の関係を正しく理解する能力が、読む力や「思考・判断・表現」という高次の能力を伸ばすことに寄与する可能性があるといえます。R6においてもR5と同程度の受検者数があれば、より正確な分析が可能になります。

（２）DEPの伸びと県学調の関係〈数学〉

以下の表2に記載されているのは、（１）と同様の分析を県学調の数学の得点を対象に行った結果になります。表中の数値が意味するところなどは基本的に表1と変わりありませんが、以下ではもう一度それらの内容を確認しながら、結果について説明していきたいと思います。

表2：RSTの伸びと県学調〈数学〉の関係

分析対象	数と式	図形	関数	データの活用	知識・技能	思考・判断・表現
係数(中1→中2の分析)	-0.102	-0.260	0.439*	-0.221	-0.255	0.021
係数(中2→中3の分析)	-0.048	0.242	0.081	0.204	0.206	0.331

※ [*] 記載の数値が特に有意な関係が見られたもの

まず、表2中の「数と式」、「図形」、「関数」、そして「データの活用」はそれぞれ学習指導要領で数学の「教科の領域」として定められているものです。したがって、表2の2列目から5列目には県学調の数学の問題のうち各領域に対応する問題への解答結果（得点）にDEPの成績の変化がどのように関係していたのかを検討した結果が記載されています。ここでも、表1と同じように、たとえば「関数」の2行目の「係数」の0.439*という値は、中1時点で「数と式」の得点が同じ生徒のうちDEPの偏差値が1年間で5以上高くなった生徒はそうでない生徒に比べて中2時点の「関数」の得点が平均的に0.439点高いことを意味しています。そして、分析の結果からは、DEPの成績の伸びと統計的に有意な関係にあるのは中2時点の「関数」の得点であることが示唆されています。

また、表2中の「知識・技能」と「思考・判断・表現」はそれぞれ学習指導要領における「評価の観点」として定められているものであり、したがって、表2の6列目から7列目には県学調の数学の問題のうち各評価観点に対応する問題への得点にDEPの成績の変化がどのように関係していたのかを検討した結果が記載されています。そして、分析の結果からは、DEPの成績の伸びと統計的に有意な関係にあるものはみられなかったことがわかります。

今回の分析結果からは、DEPという読解力の中でも最も基本的な文節の関係を正しく理解する能力が数学においては中2時点の「関数」の領域の学修に寄与していることが示唆されたといえます。同様の関係が昨年度の分析結果においても確認されていることをふまえると、この関係は、受験した集団の特徴に依らない比較的安定したものである可能性があるといえます。

おわりに

本年度は、RSを継続して測定するとともに、RSTの各領域と県学調の関係を調べることができました。今後も、これらの研究蓄積を生かし、効果的な指導方法をみなさんと共に吟味していきたいと考えています。